

猿ヶ京片耳伝説

国枝史郎

青空文庫

痛む耳

「耳が痛んでなりませぬ」

と女は云つて、てのひら掌で左の耳を抑えた。

としま年増ではあるが美しいその武士の妻女は、地に据えられた駕籠の、たれのかかげられた隙から顔を覗かせて、そう云つたのであった。

もう一挺の駕籠が地に据えられてあり、それには、女の良人おっとらしい立派な武士が乗っていたが、

「こまつたものだの。出来たら辛しんぼう棒おし。もう直じきだから」

と、優しく云った。

「とても辛棒なりませぬ。痛んで痛んで、いまにも耳が千切れそ
うでございます」

と女は、武士の妻としてはあだ仇めきすぎて見える、細眉の、くく
り頤の顔をしかめ、身悶えした。

「このまま沼田まで駕籠で揺られて参りましては、死にまする、
死んでしまふでございましょう」

「ばか莫迦な、耳ぐらいで。……とはいえそう痛んではのう」
と武士は、当惑したように云った。

ここは、群馬の須川在、猿ヶ京であつた。

三国、大源太、仙ノ倉、万太郎の山々に四方を取り巻かれ、西

川と赤谷川あかやとの合流が眼の下を流れている盆地であつた。

文政二年三月下旬の、午後の陽ひが滑らかに照つていて、山々谷々の木々を水銀のように輝かせ、岩にあたつて飛沫しぶきをあげているたにみず谿水を、幽かすかな虹で飾っていた。散り初めた山桜が、時々渡る微風に連れて、駕籠の上へも人の肩へも降つて来た。

「やむを得ない」

と武士は云つた。

「舅殿がお待ちかねではあろうが、そう耳が痛んでは、無理強いに行くもなるまい。……今夜一晚猿ヶ京ゆやどの温泉宿で泊まることにしよう」

「そうしていただきますれば……そこで一晚手あてしましたら、

……明日はもう大丈夫」

と女は云つて、遙かの谿川の下流、山の中腹のあたりに、懸け作りのようになって建ててある温泉宿ゆやど、桔梗屋の方を見た。

「聞いたか」

と武士は、駕籠の横の草の上へ腰をおろし、挿み箱を膝の上へおせている、忠実らしい老僕へ云つた。

「今夜はここの温泉宿へ泊まるのじや。そちも皺のばしが出るぞ」

「有難いことで」

と僕しもべは云つた。

「越後の長岡から三国を越しての旅、おいぼれの私には難渋で」

ございましたが、一晩でも湯治が出来ましたら元気が出ることでございましょう」

猿ヶ京と云われているだけにこの辺には猿が多く、それが木の枝や藪の蔭などから、この人たちを眺めていた。丘をへだてた竹たけの叢けむらのほとりから、老鶯ろうおうの啼なき音ねが聞こえて来た。

「痛い！ ま、どうしてこう痛むのだろう！」

女は駕籠の中で突つ伏した。

「駕籠屋、桔梗屋へやれ」

と武士は、あわてたように云った。

お蘭は、月を越すと、相思の仲の、渋川宿の旅舎はたごや、布施屋の

長男、進一のもとへ輿入ることになっていた。今夜も彼女は新婚の日の楽しさを胸に描きながら、帳場格子の中で帳面を調べている父親の横へ坐り、縫い物の針を動かしていた。結い立ての島田が、行燈の灯に艶々しく光り、くくり頤の愛くるしい顔には、幸福そうな微笑さえ浮かんでいた。

土間をへだてた表戸はもう下ろされていたが、昼の間に吹き込んで来た桜の花が、敷居の下に残っていて、長い薄白い雪の筋かのように見えていた。

「こんな気の毒な男があるのですよ」

という声が聞こえた時、両耳の辺ばかりにわずかの髪をのこしている、お父親とうさんの禿はげた頭が上がり、声の来た方へ向いたので、

お蘭もそつちへ顔を向けた。

猿ヶ京にたつた一軒だけ立っている湯宿、この桔梗屋は、百年以上を経た旧家だといわれていたが、それはこの店の間の板敷が、黒檀のように黒く艶を出しているのでもうなず領かれた。

板敷には囲炉裡が切つてあり、自在鉤にかけられてあるやかん薬罐からは、湯気が立っていた。炉を囲んでいるのは五人の湯治客で、茶を飲み飲みさつきから話しているのであった。

「こんな気の毒な男があるのですよ」

と云つたのは、その中の、絹商人だという三十八、九の、顔にうすあばた薄菊石のある男であった。

「お侍さんですがね、若い頃に、あるお屋敷へ、若党として住み

込んだそうで。ところがそこに、若い綺麗なお嬢様がおありな
 されたが、同藩のお奉行様のご子息と婚約が出来、いよいよ行かれ
 ることになったそうで。婚礼の晴着姿で駕籠に乗られた時の美し
 さにはその若党も恍惚うっとりとしたそうです。ところがどうでしょう、
 向こうのお屋敷で、今頃は高砂たかさごをうたつておられるだろうと思
 われる時刻に、そのお嬢様が一人で帰つて来られ、若党へ、これ
 からすぐ妾と一緒に رفتておくれとおっしゃつたそうで。どこへ
 と若党が驚いて訊くと、いいから妾と一緒においでと云うのだそ
 うです。そこで若党は夢中のありさままで従ついて行つたところ、お
 嬢様は途中で駕籠をやとい、山越しをして某なにがしという湯治場へ行か
 れ、そこで一夜をその若党と明かされたそうですが、もちろん二

人の仲には何事も……」

「へえ、そいつは感心ですねえ。……それにしてもどうして婚礼の席から？」

片耳を切られて

こう口を出したのは、越中の薬売りだという三十一、二の小柄の男であつた。

「まあお聞きなさい。……お嬢様は、良人おつとになる奉行の息子というのが、兎みつくち口ぶおとこの醜男ぶおとこなので嫌いぬいていたんですが、親と親との約束なのでどうにもならず、それで婚礼の席へは出たものの、

今夜からこの男と……と思つたらいても立つてもいられず……そこでその席から逃げ出し……若党をつれて湯治場へ遁のがれ……」

「婚礼の当夜ではあり、若い若党と、そんな温泉宿ゆやどで、二人だけで泊まったのに、何んでもなかつたとは偉いですなあ」

と云つたのは、同じ越中の薬売りであつた。

「だが人は信じますまいよ」

「そうなのです」

と、絹商人は話をつづけた。

「お嬢様の父親というのがまず信じなかつたそうで……」

「どうしました？」

「主家の娘を誘惑し、連れ出し、傷者にした不屈きの若党という

ので……」

「どうしました？」

「打ち首……」

「へえ」

「というところを、片耳を剃いで、抛りだした^{ほう}そうで」

「ひどいことをしやがる。娘がそいつを止めないという法はない」

「そうですとも」

「それから娘はどうしました？」

「翌年、他藩の重役のご子息のもとへ、めでたく輿入れなされた
そうで」

「結構なことで、フン！」

「結構でないのは若党——お侍さんで、ガラリと性質が変わりま
したそうで」

「変わりましようなア」

「それからは女という女を憎むようになったそうです」

「あつしだつて憎みますよ」

と、口を出したのは、八木原宿の葉茶屋の亭主だという、四十
がらみの男であつた。

「あつしばかりじゃアない、誰だつて憎むでしようよ。……ねえ
ご主人、そうじゃアありませんか」

こう云うと葉茶屋の亭主だという男は、桔梗屋の主人の方へ顔
を向けた。

桔梗屋の主人の佐五衛門は、持っていた筆を、ヒョイと耳へ挿んだが、帳場格子へ、うっかり額を打ち付けそうに頷き、

「ごもつともさまで、女出入りで、そんな酷いひど目にあわされましたら、誰だつて女を憎むようになりますとも」

「若党つていう男に、同情だつてするでしょうねえ」

とまた口を出したのは、左官の親方だという触れ込みの、三十四、五の男であつた。

「さようですとも、その気の毒な若党殿には、私ばかりか、誰だつて同情するでございましょうよ」

と、佐五衛門はまた頷いてみせた。

「ところで、その若党——お侍さんが、どんな塩梅あんばいに女を憎ん

だかつてこと、お話ししましょうかね」

と、絹商人は、話のつづきを話し出した。

「そのことがあってからというもの、そのお侍さんは、生活たつきの途みちを失い……そりやアそうでしょうよ、片耳ないような人間を、誰だつて使う者はおりませんからねえ。……ウロウロと諸地方を彷徨さまよいましたそうで。……木曾街道を彷徨さまよっていた時のことだといいますが、板橋宿外れの葉茶屋へ寄つて、昼食をしたためたそう
で。すると側そばに、二十一、二ぐらいの仇めいた道中姿の女がいて、これも飯を食べていたそうで。いざお勘定となると、百文の勘定に、何んと女は小判を出して、これで取ってくれといったそう
で。ところが、そんな葉茶屋ですから釣銭がない。それで女にそうい

うと、女は当惑したような顔をしいしい、妾にも小銭はないと云い、ヒヨイとそのお侍さんの方へ向き、

『申し兼ねますがお立て替えを』

『よろしゅうござる』

とお侍さんは何んと感心にも、乏しい懐ふところ中の中から金を立て替えてやり、それを縁に連れ立って歩き、日の暮れに上尾宿まで参りましたところ、女の姿が見えなくなつたそうで。

『はぐれた筈もないが』

と不思議に思いながらその宿の安宿へ泊まり、翌朝発足して熊谷宿まで行くと、棒ぼう端はなの葉茶屋にその女がいたそうで。そこでお侍さんも寄つて茶を飲み、女と話したそうですが、いざお勘定

となると同じことが行われたそうで。……女が小判を出す、葉茶屋には釣銭がない。

『申し兼ねますがお立て替えを』

『よろしゅうござる』

……こうしてそこを出、野道へさしかかった時、お侍さんが開き直り、

『拙者立て替えた銭お払いなされ』

……すると女はさもさも軽蔑したように、

『あればかりの小銭こぜに……』

——とたんにお侍さんは女を斬りき仆したお……いや、峰打ちで気絶するまで叩き倒したそうで」

「なるほど」

「お侍さんの心持ちはこうだったそうで『弱いを看板に、女が男をたぶらかしたとあつては許されぬ』と……」

「こりやアもつともだ」

と云つたのは、易うらない者だという触れ込みの、総髪そうかみの男であつたが、

「ご主人、何んと思われるかな？」

と、佐五衛門の方を見た。

佐五衛門は、少し当惑したような表情をしたが、

「さようで。女が男をたぶらかすということ、こいつアよろしくございませんなあ。……重ね重ね、そのお侍さんはご不運で」

薪まきが芟はねて炉の火がパツと焰ほのおを立てた。

湯治客たちは一斉に胸を反そらせたが、五人が五人ながらたがいに顔を見合わせた。

大盗になった理由

(厭な話だこと)

とお蘭は思った。

(男も男だけけれど、女の方が悪いわ……)

この囲炉裡側いろりばたへは、毎夜のように客が集まって来て、無聊なままに世間話をした。それを聞くのを楽しいものにして、お蘭も、

毎夜のようにここへ来て、お母親かあさんが早く死去なくなり、お父親とうさん一人きりになっている、その大切なお父親とうさんの側に坐り込み、耳を澄ますのを習慣としていた。

しかし十七歳の、それも一月後には嫁入ろうとする処女きむすめにとつては、今の「女を憎む男の話」は嬉しいものではなかった。

(わたし行つて寝ようかしら)

「ところが、そのお侍さんは気の毒にも、女のためばかりでなく、金のために、とうとう半生を誤りましてねえ」

と、絹商人だという男が話し出したので、お蘭は、つい、また聞き耳を立てた。

「その後、そのお侍さんは、いよいよ零落し、下谷のひどい裏長

屋に住むようになられたそうです。ところがその長屋の大屋さん
 ですがちよつとした物持ちでしてな、因業いんごうだったので憎まれて
 いましたが、大屋のうえに金持ちなので齒が立たず、店子たなこたちは
 齒ぎしりしながらも追ついで従しゅうしていたそうです。ところがある晩、
 祝い事があるというので、この大屋さん、店子一同を自宅うちへ招待よ
 んでご馳走したそうです。とそこへ新鑄しんぶきの小判十枚が届けられて
 来たそうです。ナーニ、その小判の自慢をしたかったので大屋の
 禿はげ頭あたま、店子たちを招待よんだんで。さて自慢をしたはいいが、
 ご馳走が終つてみんな帰つた後で、小判を調べてみると、一枚不
 足しているんで。盗られた！ と思つたとたんに自分と一番近く
 並んでいた貧乏なお侍さんの、物欲しそうだった顔が眼に浮かん

で来たそうで。そこで『盗んだなアあいつだ』と云いふらしたそ
うで。これが長屋中の評判になったんですねえ。お侍さんはどう
とう居たたまらずに長屋を出たそうですが、出る際黙って小判一
枚を大屋さんの門口から抛りこんだそうで。『やっぱりあいつが
やったんだわい』と大屋さんはまたこのことを云いふらしたそう
ですが、その実お侍さんは、大事な刀を売りはらつて、その金で
償つくつたのだそうです。ところがどうでしょうその年の大晦日おみそかに
なつて、煤払いをしたところ、なくなつたと思つた新鑄しんぶきの小判
が畳の下から出て来たそうで。さあさすがの大屋さんも参りまし
たねえ。『あのお侍さんにあやまらなければならねえ』とその行ゆ
方くえをさがしましたが、行方がわからない。当惑しながら日を送り、

三月になるとお花見、向島^{むこうじま}へお花見に行つたところ、そのお侍さんが花の下で、謡^{うたい}をうたつて合力を乞うていたそう。そこで大屋の禿頭、オズオズ寄つて行つて、事情を話して小判を返そうとすると『エイ!』という鋭い声で。見れば大屋の首が堤の上に、ころがつていたそう。というところへ行きたいんですが、やはり峰打ちで叩き倒したんだそう。……しかし、それからが大変で『金がなければこそこの恥辱を受ける』とそのお侍さん、その晩大屋さんの家へ強盗^{おしこみ}にはいつて、大金を奪いとつたのを手始めに、大泥棒になつたそうです」

風呂の中の人形

「泥棒に！」

と、脅おびえたような声で云つたのは佐五衛門であつた。でも、すぐに幾度も頷き、

「無理はない。次から次と、ひどい目にあわされれば、どんな人間だろうと……」

「おおご主人もそうお思いか」

と、云つたは、易うらない者という触れ込みの男であつたが、

「それで安心」

と口を辻らせたように云い継ぎ、ハツとしたように、急に黙つてしまった。この時深い谷の方から鋭い笛の音が一声聞こえて来

た。

「何んだろう」

と云つたのは、佐五衛門であつた。

「季節違しゅんいだから鹿笛じゃアなし。……呼よびこ笛かな」

首をかしげ、眉と眉との間へ皺をたたんだ。

お蘭は立ち上がった。

「どこへ行くんだえ」

「お湯へはいつて、それから寝るの」

「こんな晩は早く寝た方がいいなア」

五人の湯治客も、今の笛の音に不審を起こしたらしく、黙って顔を見合わせ、耳を澄ました。

お蘭は湯に浸かりながら空想にふけていた。

（あたしは男に憎まれたり、大事な男の心を、女を憎むようなひねくれた心になんかしやしない）

そんなことを空想していた。大事な男というのは、一カ月前になると自分の良人おっととなるべき、布施屋ふせやの息子のことであった。

（進一さんだつて、わずかな金——小判一枚のゆきちがいぐらいで、人を叩き倒すような兇暴あつい性質たちの人じゃアないから安心だわ）
彼女にはさつきの湯治客の話が、やはり心にかかっているのであつた。

この湯殿は主屋おもやと離れてたててあり、そうして主屋よりひくく

たててあつた。それで二十段もある階段が斜はすに上にかかつて、その行き詰まりの所に入り口があり、そこに古びた長方形の行燈がかけてあつた。それでこの十坪ぐらいしかない湯殿は、ほんのぼんやりとしか明るくなかつた。湯槽ゆづねの広さは三坪ぐらいでもあろうか、だから高い階段の一番上に立つて、湯に浸かっているお蘭を見下ろしたなら、薄黄色い行燈の光と、灰色の湯気とに包まれた、可愛らしい小さい裸体はだかの人形が、行水でも使っているように見えたことだろう。明礬みょうばん質しつのこの温泉いでゆは、清水以上に玲瓏としていて、入浴はいつている人の体を美しく見せた。胸が豊かで、膝から下の足が素直に延びているお蘭の体は、湯から出ている胸からは瑪瑙めのう色いろに映はえていたが、胸から下は、白蠟はくろうのように

蒼いまでに白く見えていた。お蘭は時々唇をとんがらせ、顔を上向け、眼の辺へかかつて来る、絹糸のような湯気を吹き散らした。フーツと音を立てて吹くのであった。その動作は、罪のない子供の、屈托のない動作そのものであった。

フーツとまた吹いた。そうして笑った。

と、その時背後うしろの方で物音がした。お蘭は振り返って見た。頬冠りをした一人の男が、階段の下に、行燈の光を背にして立っていた。

「まあ」

とお蘭は云った。

「それ妾の着物よ。どうするのさ」

男女混浴の湯殿へ、男がはいって来るに不思議はなかったが、その男が、衣裳棚の中へ脱ぎ入れてあつたお蘭の着物を抱えていたので、そう云つたのであつた。男は着物を棚の中へ返した。

「お湯へはいつたらどう」

とお蘭は云つた。

「お客様ね、何番さん？」

しかし男は返辞をしないで、暗い頬冠りの中から刺すような眼でお蘭を見詰めた。

「おかしな人ね。……何番さんだったかしら？ ……お湯へおはいりなさいよ」

そういうとお蘭は、背中を湯ゆおもて面へ浮かせ、蛙かわず泳およぎをして

湯槽ゆぶねの向こう側へ泳いで行き、振り返るとぼんのくぼを湯槽の縁へかけ、フーツと、唇をとんがらかして湯気を吹き、男と向かい合った。

「おかしな人ね、棒ツ杭のように突っ立ってるってことないわ。……わかった、あんた恥ずかしがり屋さんね、女の子と一緒にお湯へはいるの恥ずかしいのね。……大丈夫、あたしかまやアしないことよ。……おはいりなさいよ。フーツ」

「はいってもいいかい」

と男ははじめて云った。その声は深みのある、また濁りのある、聞く人の心をゾツとさせるようなところのある声であった。しかも四辺あたりを憚るように、押し殺した声であった。

怪しの男

でもお蘭にはそんなことは気が付かないらしく、

「どうしたって変な人ね、湯治に来たくせに、湯へはいつていいかいなんて。……おはいりなさいよ」

「じゃアはいろいろ」

男は湯槽ゆづねの中へ下りて来た。すぐ沈んだ。

「湯の中へ頬冠ほのかぶりしたままではいるなんてことないわ。おとりなさいよ」

「取らねえ方がいいようだ」

「何故よ」

「恐がるといけねえ」

「誰がよ」

「娘っ子が」

「あたし？ フーツ。……湯屋の娘が男の顔見て恐がっていたのでは商売にならないわ。フーツ。明日は雨よ、今夜のお湯とても湯気が濃いんだもの。匂いだって強いし。……こうと、あんたきつとかりゆうど 狢師さんね」

「狢師？」

と男は吃驚びっくりし、

「何故だい？」

「いい体しているもの。……骨太で、肉附きがよくて、肩幅が広くて……」

「猟師じゃアねえ」

「じゃア樵夫きこりさんね」

「樵夫だつて」

吃驚りして、

「違う」

「そう」

「お前さん何んていう名だい？」

と今度は男が訊いた。

「お蘭ちゃん」

「ふうん。そのお蘭ちゃん幾歳いくつだい？」

「十七」

「年頃だ」

「そうよ。だから妾わたし来月お嫁に行くんだわ」

「どこへ？」

「進一さんの所へ」

「親しそうに云うなア。以前まえから知ってる男かい？」

「幼な馴染なの」

「お前さんを可愛がっているかい？」

「雪弾丸ゆきだま投げつけてよく泣かせたわ」

「ひどい野郎だな」

「あたしの泣き顔が可愛いのでそれが見たかつたんだって」

「負けた」

と男ははじめて笑った。好意ある笑い方だった。

この時、また鋭い笛の音が谷の方から聞こえて来た。と、それに答えて、山の方からも同じような笛の音が聞こえて来た。

「チエ」

と男は舌打ちをした。

「取巻きやアがったな」

「何よ？」

とお蘭は聞き咎めた。

「取巻いたって？」

「ただけ猛々しいケダモノを取巻いたというのさ」

「猪？ ……だって、しゅん季節じゃアないわ」

「猪よりもっと恐ろしいケダモノだ」

「何んだらう？」

「おしこみ邪悪——そうだ、女をとりわけ憎んだっけ。 ……強盗、ひつけ放火、ひとごろし殺 人、ありとあらゆる悪業を働いた野郎だ」

「じゃア『ごん三国峠の権』のような奴ね」

「知ってるのか？」

「わるもの三国峠の権の悪漢だってこと、誰だって知ってるわ。でも、

その権、ご領主様に捕えられたじゃアないの」

「うん、沼田のお城下で、土岐様の手に捕えられたよ」

「お牢屋へ入れられたっていうじゃないの」

「その牢を破ったんだ」

「まア。いつ？」

「昨夜」
ゆうべ

「まア」

「そいつがこの土地へ逃げ込んだらしい」

「どうして解るの？」

「捕り手がこの家を取巻いたからさ」
うち

「じゃアこの家の中に？」

「うん。……恐いか！」

「恐いわ」

「だから俺はさつき恐かアないかと云ったんだ！俺が権だ！」
ヌーツと男は、湯から、巨大な柱でも抜き上げたように立ち上がった。

「フーツ」

とお蘭は湯気を吹いた。

「あたし思いあつたわ、あんたきつと役者ね」

「何んだって？」

「あんたきつと旅役者だわ」

「……………」

「とても芝居うまいものね」

男は湯の中へ沈んでしまった。

三国峠の権

「そうかい、俺を役者だというのかい」

と男は溜息をしながら云った。頬冠りの顔は俯向いて、湯おもての面に見入っていた。

「三国峠の権の真ま似ね上手なものね。お役者さんよ」

「どうして物真似だってこと解るんだい？」

「そりゃア眼め力めだわ。……あたし客商売の温ゆ泉や宿どの娘でしょう。

ですから、悪い人かい人か、贋物か本物かってこと一眼見ればわかるわ」

「なるほどなア、それで俺おいらを……」

「いい人だと睨んだのよ。だってそうでしょう、女と一緒に風呂にはいるの恥ずかしがったり、顔見られるの恥ずかしがって、頬冠り取らなかつたりするあなたですものね。恥ずかしがり屋に悪人つてもものないわ」

「恥ずかしがり屋に悪人はないとも。……だが俺おいら恥ずかしがり屋かなア」

「あたしの眼に狂いないわ」

「それならいいが」

「フーッ。狂いないわ」

「俺おいらア初めてだ」

と男はしみじみとした声で云った。

「冒頭のつけから善人だと女に云われ、何んの疑がいもなくぶつかって来られたなア、今夜のお蘭ちゃんが初めてだ。……礼云うぜ」

烈しい呼笛よびこの音がこの温泉宿ゆやどの表と裏とから聞こえ、遙かに離れている主屋の方から、大勢の者の詈しり声や悲鳴や、雨戸や障子の仆れる音が聞こえて来た。

「捕手いぬどもとうとう獵立かりたてに来やがったな！ ようし！」

こう云った時にはもう男は湯槽から躍り上がっていた。

「おいお蘭ちゃん、済まないがお前の着物貰って行くぜ、……着物どころかお前の体も貰うつもりだったが、裸身はだかで——そうよ、心も体も綺麗な裸身でぶつかって来られたので、俺らにやア手が

出せなかつた。……お前のためにも幸福しあわせだつたらうが、俺らにも幸福しあわせだつた。将来これからは俺らは女だけは。……それもお前のおかげで女の観方みかた変わったからよ。世間にやお蘭ちやんのような女もあると思やアなア。……それにしても、俺らに最初はなにぶつかつて来た女が、お前のような女だつたら、俺らこんな身の上にやアな
らなかつたんだが……」

頬冠りを取り、手拭いで体を拭き拭き、

「それにしても進一さんて人は幸福しあわせだなア、お蘭ちやんのような可愛らしい人を嫁さんにするなんて。……おいお蘭ちやん、俺らお前さんに餞はなむけ別するぜ。どうかまア今のような綺麗な裸体はだかの心で、進一さんに尽くしてくんなど。……男なんてもなア女のや

り方一つで、どうにでもなるんだからなあ」

男は手早くお蘭の着物を纏まとった。

「アツハツハツ、この風で捕手いぬどもの眼を眩くらしとつ走るのよ！

……おかげで湯にもはいれた。……心と一緒に体も綺麗になったつてもよき」

お蘭は驚愕した大きな眼で男の顔を見詰め、

「あ、あんたの耳！ ないわなわ、一つしかないわ！」

男はこの時もう階段を上がっていたが、振り返ると云った。

「三国峠の権は片耳なのだよ」

三国峠の権が女装をし頬冠りをして湯殿から飛び出し、廊下づ

たいに主屋の方へ走り出した時には、沼田藩の捕り手たち数十人
 が、この温泉宿へ混み入つて、部屋部屋を探し廻つていた。上こうず
 野、下野しもつけ、武蔵むさし、常陸ひたち、安房あわ、上総かずさ、下総しもうさ、相模さがみと股にか
 け、ある時は一人で、ある時は数十人の眷属けんぞくと共に、強盗おしこみ、
 放火ひつけ、殺ひとごろし人の兇行を演じて来た、武士あがりのこの大盗が、
 破牢して逃げたということだけでも、沼田藩は、捕り手組子を押
 し出して捕縛に大わらわにならなければならぬのであつたが、
 そればかりでなく、三国峠の権は、破牢するとその夜、藩の蔵奉
 行五百枝将左衛門の屋敷へ押し入り、主人将左衛門の片耳を切り
 落とし、「汝の娘、松乃まつのの嫁入り先、長岡の牧野家の槍奉行、坂
 田方へ押し入り、松乃の片耳を切り取るぞよ」と威嚇して立ち去

つたのであつた。一藩が震駭しんがいし、数十人の捕り手を繰り出し、逃げ込み先の猿ヶ京の温泉いでゆをおっとり囲んだのは当然といえよう。権は今廊下を走つて行く。と、行く手に四、五人の捕り方が現われた。権は素早く廊下添いの部屋の襖を開けて飛び込んだ。

「それ」

と捕り方たちは走つて来た。襖をあけて覗くと、若い女が俯伏しに寝て、両袖で顔をかくしていた。

「女だ」

「恐いことはないぞ。アツハツハ」

と、捕り方たちは走り去つた。権はしばらくじつとしていたが、やがて起き上がると廊下へ出、主屋の方へ小走り出した。廊下が

丁字形になつてゐる所へ来た。左へ曲がつたとたん、二人の捕り方にぶつかった。顔を見られた。

懺悔の妻

「曲者！」

と一人の捕り方が正面から組付いて来た。

「わッ」

と捕り方は悲鳴をあげて仆れた。脇腹から血が流れ出ている。

「おのれ
「汝！」

ともう一人の捕り方が横から躍りかかった。権のあいくち首が捕り

方の咽喉へ飛んだ。権は、仆れてノタウチ廻る捕り方を見すてて走った。

「お頭かしらアーツ」

と呼ぶ声がした。行く手の降り口から、囲炉裡側ぼたで、片耳のないう武士の話をしていた絹商人が、顔を出していた。

「七五郎か、他の奴らは？」

「さつきまで囲炉裡側で、五人揃って、お頭のおいになるのを待っていました。が、捕方いぬどもが飛び込んで参りましたのでチリヂリバラバラ、この家のあちこちに……」

「集めなけりやアならねえ。……一つに集まって三国を越して越後境いへ！」

主屋と離れ、崖の中腹に、懸け作りになつている別館はなれが一棟、桜や椿ほおや朴の木に囲まれ、寂然として立っていた。主屋と別館はなれとをつないでいるものは、屋根を持つてゐる渡り廊下で、真珠のような月の光が、木の間を洩れて廊の欄干へ、光の斑を置いていた。別館の一間に寝ているのは、耳を病んでいる松乃であつた。枕もとには水を張つた小桶が置いてあり、その横には良人おっとの内記ないきが、心配そうにして坐つていた。

この優しい親切な良人は、寝もしないで妻の介抱をしているのであつた。

「だんだん騒ぎが烈しくなるが、何んだらう？」

長岡藩の槍奉行、坂田内蔵之丞の総領内記は、妻が眠るようと、わざと燈を細めた行燈を無心に見詰め、耳をかしげながら呟いた。

松乃は、痛む左の耳を上にし、反対の頬を枕にうずめ、夜具の襟から、蒼白の顔を覗かせ、眼を閉じていた。さつき、鋭い呼笛よびこの音ねがし、つづいて主屋の方から、悲鳴や、襖、障子を蹴ひらく音や、走り廻る音が聞こえて来、僕しもべの三平翁じいやが、あわただしく様子を見に行つたがまだ歸つて来ない。——これらのことも心にかかつていたが、しかし彼女には、もつと心にかかることがあつた。それは、この部屋そのものであつた。

彼女がまだ娘であつた頃、同藩——沼田藩の槍奉行、齊藤源太

夫の息子源之進と結婚することになり、婚礼の席へ臨んだ。ところが源之進が余りの醜ぶおとこ男なのに厭気がさし（長いこれからの浮世を、こんな男と一緒にくらすなければならぬとは。厭だ厭だ）と思ひ詰め、生き一本の娘の、前あとさき後見ない感情からその席を遁のがれ、実家へ逃げ帰り、居合わせた若党の井口権之介というのを連れ、夢中で家出し、駕籠で山越えをし、この猿ヶ京の、この桔梗屋の、この別館はなれの、この部屋で一夜を明かしたが……

（その因縁の部屋へ泊まるとは）

松乃は眼を開き、いまさらに部屋の中を見廻した。辺鄙へんぴの山の温泉ゆの宿は、部屋の造作つくりも装飾かざりも以前むかしと変わらなかつた。天井の雨漏りの跡さえそのままであつた。

(主家の娘を誘惑そそのかしたというかどで、権之介は、お父様に片耳を刺がれて放逐されたが、その後どうしたことやら。……噂によれば、身を持ち崩したあげく、恐ろしい大賊になったということだが……三国峠の権という大賊に。……それもこれも元はといえわたしば妾の不注意から。……あの人には罪はなかつたのだ)

「痛い！」

と松乃は思わず悲鳴をあげた。耳の痛みが烈しくなつたからである。

実父ちちの将左衛門から、久しく逢わないから逢いたい、婿殿ともども逢いに来るようにと伝言ことづつてがあつた。そこで松乃は良人と一緒に里帰りの旅へ出たのであつたが、昨夜、浅貝あさかいの旅宿やどりあたり

から耳が痛み出し、次第に烈しくなつて来た。今は堪えられないほどに痛むのであつた。

(片耳を切られた権之介の怨み！ それで妾の耳が！)
こんなことも思われた。

(恐ろしい因縁の部屋で、痛む耳の手あてをすることは)
ゾツとするような思いもした。

そつと良人を見た。妻の過去の過失など知らないで、ただただ松乃を愛している内記は、気づかわしそうに妻の顔を見詰め、
「痛むか、困つたのう。この辺には医者はなし……」
と云つた。

主屋の方でのけたたましい物音は、いよいよ烈しくなつた。

と、渡り廊下をこつちへ走つて来る足音がした。

内記は思わず刀を引きつけた。

あわただしく襖をあけて走り込んで来たのは僕しもべの三平であつたが、

「大変でございます。お捕り物で！ ……昨夜、沼田様のお牢を破りました三国峠の権という大泥棒が……」

「あッ」

と松乃は起き上がった。

「三国峠の権が？」

「はい。 ……破牢したばかりか、 ……奥様、旦那様、決してお驚きなさいますな、 ……それに致しても何んと申してよいやら……」

その権という泥棒、奥様の実家おさと、五百枝様のお屋敷へ忍び入り、
 将左衛門様の片耳を切り取り……」

「あッ」

と松乃は立ち上がった。

「お父様の片耳を！ ……権が！」

「はい。 ……そうしてここへ、この猿ヶ京へ逃げ込みましたそう
 で。 ……それで沼田様からお捕り方が出……」

「権！ 権之介よ！ ……無理はない、さあ妾の耳も切っておく
 れ！ ……みんな妾が悪かったからじゃ！ ……切つて怨みを晴
 らしておくれ！ ……おお痛む！ 痛む痛む耳！ いつそ切られ
 た方が！ ……あげます、この耳あげます！ 権よ権よ切つ

ておくれ！ ……昨夜から痛む訳じゃ！ お父様がお切られなされたのじゃもの！ ……同じ時刻から痛み出した耳！ ……親の苦痛が娘へ伝わったのじゃ！ ……それもこれも権の怨み！ ……権よ、さあこの耳を切っておくれ！」

松乃は廊下へ走り出た。

救われた命、助かった心

これより少し以前まえのことであるが、桔梗屋の主人あるじ佐五衛門は、行燈を提げ、帳場の辺をウロウロしていた。

(娘は？)

とこのことばかりを思っていた。

(どこへ行つたらう？ 何をしているのだ！ こんな時に、こんな物騒な時に！)

廊下の方から、部屋部屋から、二階からも階下したからも、足音、悲鳴、呟声、罵しり声、物を投げる音、襖障子を開閉あけたてする音が、凄まじく聞こえて来た。

——五人の湯治客が囲炉裡側ばたで、片耳のない武士の話をしていると、表戸を蹴開き十数人の捕り方が混み入り「三国峠の権という盗賊この家に潜みおる、縛め取るぞ」と叫び家探しにとりかかった。裏口からも捕り方は侵入したらしく、その方からも足音や呟声が聞こえて来た。

それはほんの寸刻いましがた前のことで、今はもうこの店の間には、捕り方も湯治客もいなかった。捕り方は奥へ走り込み、湯治客たちは散々ちりぢりに逃げたからであった。

「娘は？」

暴風あらしの吹いた後のように、帳場格子は折れ、硯箱はひっくりかえり、薬罐は灰神楽はいかぐらをあげている店の間を、グルグル廻りながら（娘は？）と佐五衛門は、そのことばかりを思った。

（あッ、風呂へはいりに行ったつけ！）

やつと思ひ出した。そこで行燈ほうを抛り出し、廊下の方へ走り出した。

「お父様アーツ」

と、お蘭が、その廊下から駆け込んで来た。

「お蘭が！ わッ、その風は！」
ふう

お蘭は、男の着物、それも襷袢ぼろのような着物を纏っていた。

「これ、権の着物よ、三国峠の権の……」

「権の？ じゃア手前、……」

「逢ったの、権と。……風呂で……」

「ヒエーツ、それじゃア手前、体を、権に！ ヒエーツ、嫁入り前の体を！」

「何云ってるのよ。権、いい人だわ、恥ずかしがり屋だわ。悪人じゃアないわ。妾の眼に狂いはないわ！ ……助けてやらなけりやア！ 捕られちゃア可哀そうよ」

「手工付けなかつたと？ お前へ！」

（本当だろうか？）

（本当ならどんなに有難いことか！）

と思う心の裏に、そんなことのあるう筈がないという不安が、すぐに湧いて来た。

（兇悪で通っている三国峠の権が、若い娘と、人のいない風呂で……）

ムラムラと疑惑が募るのであった。

でも、彼は、娘が、ひたむきに権を助けようとして焦心あせするばかりで、権に対し、怒りも悲しみも怨みもしていない様子を見ると、やはり権が、自分の娘へ毒牙を加えなかつたことを、認めるより

仕方がなかつた。

(好きな許いいなずけ婚の進一と、一月先になると、夫婦いっしょになることになつてゐる娘だ、それが泥棒に……そんなことをされようものなら、泣き喚き怨み憤るは愚か、突き詰めた心で、首を絞くるぐらゐのことはやるだろう。それだのにどうだお蘭は、泥棒の権を助けようとして夢中になつてゐる。……とすると権は、やつぱり、ほんとうに、お蘭に手をつけなかつたんだ！)

「偉えぞ権！」

と、佐五衛門は、嬉しさと、感謝と、神々しい奇蹟にでも遭ぶつかつたような心持ちとで、思わず喚き出した。

「悪人じゃアねえとも、権！ 悪人どころか、神様みたいな男だ

！」

「竹法螺たけぼらを、お父さん、竹法螺を！」

「吹くか、いいとも、竹法螺吹いて、捕り方の奴らを！」

柱にかけてあつた竹法螺を佐五衛門はひつ外した。

「妾が吹く、妾が！」

と、お蘭は、父親から竹法螺をひつたくと、蹴放されたまま

で、月光を射し込ませている表戸の開間あきまから、戸外そとへ走り出た。

その後を追って佐五衛門も走った。

と、その時、捕り方の叫ぶ声が聞こえて来た。

「方々、ご用心なされ、三国峠の権の手下五人が、この湯宿に、権めを待ち迎えおるといふことでござるぞ！」

(あッ)

と佐五衛門は、それを聞くと、思わず口の中で叫んだ。そうして思った。

(そうか、これで解った、炉端に集まっていた五人の湯治客、三国峠の権の手下だったんだ。あいつらの話した話は——片耳を切られた武士さむらいの話は、権の過去の出来事だったんだ。ああいう話を俺らおいに聞かせておいて、こんな場合に、味方になってくれと謎をかけたんだ。それに違えねえ。……つづけざまにあんな目に逢わされりやア誰だつて悪党にならア。……三国峠の権、根は善人とも！)

谷の方から竹法螺の音が聞こえたので、捕り方たちは、三国峠の権が捕えられたと思つたのだろう、屋内や木蔭などから走り出し、谷を目ざして走つて行つた。と、その隙を狙い、五人の手下に護られた三国峠の権が、谷とは反対の、山の方へ遁がれて行くのが見られた。一刻も早く姿を隠さなければならなかつた。見れば、主屋と離れて、山の中腹にかけづくりになつてゐる別館はなれがあつて、主屋と廊下でつながれてゐた。あの別館へ一時身をかくし、手下どもが用意して来た衣裳と着換えよう——こう権は思つた。そこで崖をよじ上り、廊下へ這い上がった。部屋の中へ駆け込もうとしたとたんに、

「……権よ！ この耳を切つておくれ！」

という女の声が聞こえ、部屋から女が走り出して来た。

「……………」

「……………」

権之介——三国峠の権と松乃とはヒタと顔を合わせた。

谷からは尚お蘭の吹く竹法螺の音が聞こえて来ていた。

「権！ ……権之介様、恨みある妾の耳を、さあお切りくださいませ！」

谷からは、——本当は悪党ではない三国峠の権よ、早くここから逃げておくれというように、お蘭の吹く竹法螺の音が聞こえて来た。

「俺ア」

と権は云った。

「お前なんか知らねえ、昔から今までお前のような女知らねえ」
松乃は廊下へ仆れた。

耳の痛みが次第に消えて行く中で彼女は思った。

（救われた！ 妾は救われた）

三国峠の林の中を、五人の手下と一緒に、今は悠々と歩きながら、三国峠の権は思った。

（誰が吹いたかしらねえけれど、竹法螺のおかげで、俺ア助かったのだ）

権はその後改心したという。

青空文庫情報

底本：「怪しの館 短編」国枝史郎伝奇文庫28、講談社

1976（昭和51）年11月12日第1刷発行

初出：「富士」

1937（昭和12）年10月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：阿和泉拓

校正：多羅尾伴内

2004年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

猿ヶ京片耳伝説

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>